



子どももその声に 耳をかたむけて

尾北の子どもと教育を考えるつどい講演会



昨年11月に、江南市で「尾北の子どもと教育を考えるつどい」が開催され、「子どもへの声に耳かたむけて」子どもの人権を守るために」と題して、制野俊弘さん（和光大学教授）による講演が行われました。講演の内容を紹介しながら、改めて「子どもの人権」を守るために私たち大人はどうしたらよいかをともに考え合いたいと思います。（文中の子どもの名前はすべて仮名です）

ありのままを 受けとめる

はじめに、制野さんは、最近聞いた授業を紹介されました。ある支援学級での道徳の授業で、「正直・誠実」を扱う教材「金のおの」の授業をしたときのことです。作り物の斧を示して「この金の斧は誰のもの？」と尋ねると、ある子が「それ私の！」と答えたそうです。こういう場合、「あなたならその子ども言葉にどう対応しますか？」と、会場の私たちに問われました。

その子は、その金の斧が欲しかったという正直な気持ちを語ったのです。自分

その子の中の 光るもの

制野さんは、長年、宮城県で中学校体育教師として勤められました。生活綴り方教育の日記指導を通して子ども理解の実践をしてこられました。

「子どもが書いたり語ったりする言葉から、小さなことでいいからその子の中に光るものを見つけることです。それは、その子どもの良さや素晴らしいさを認めること。教師は、それを見つめる目と嗅覚を鍛える必要がある」と制野さんは話されました。

俊介さんの「手」という日記です。

今日、家で飼っている犬を病院に連れて行った。そしたら病院の先生の手が傷だらけだった。その傷はたぶん犬か猫にかまれた傷だと思った。

病院の先生は手をかまれても、その動物を助けたいと思ってやっているんだと思った。

普段はおとなしい俊介さんですが、制野さんは、病院の先生の手を傷に気づける彼の観察力、洞察力の豊かさや優しさを読み取りました。そして、この日記にコメントをつけて学級通信で紹介します。

いい日記だ。先生の手を見つけた俊介の目、そこから考えたこと…俊介の優しさみたいなものが伝わってくる。手には人柄が表れるが、日記には人間そのものが表れる。いい日記だ。

この学級通信を教室で読むことで、俊介さんに向けてみんなの眼差しが違ってくる。そして、俊介さんは自分のよさに気づくことで、より俊介さんらしくなれます。

「自分のよさに気づくことほど、人に自信と誇りとエネルギーを与えるものはない」と制野さんは話されました。

子どもの権利条約の12条に「意見表明

権」があります。その2項には「聞いてもらえる」権利が書かれています。人は、話を聞いてもらえるから自分らしくいられるのです。それはまた、子どもの言葉をちゃんと聞き取り、大切に扱うことが、世界中の大人たちの義務であるということです。

言動の 背景を知る

制野さんが日記指導を続けるのは、子どもの言動の背景にあるもの、ものの方や考え方の土台にあるものを知りたいと思ったからです。何気ない子どもの生活の中に子どもの理解を深める可能性が秘められています。

裕太さんの「にんにく」という日記です。

今日、家に帰ってきたら、お母さんに「にんにく買ってきて」と言われた。そして、ぼくは生協に買い物に行った。そして、ぼくは「にんにく」の正体を忘れていた。そしてぼくが買って帰ったものは「しょうが」だった。

母「こいつはしょうがだ」。次に「にんにく」の絵をかいてもらって、また買い物に行った。

この親子の姿が、裕太さんに対する制野さんの見方を表しています。

お母さんに買い物頼まれ素直に応じる裕太さん。間違っても買って来た彼にわざわざ「にんにく」の絵を書いて渡すお母さん。その絵を片手にまた買い物に行く。親に反抗的になる中学時代に、こんな

なにも素直にできる裕太さんは、この母あつてこそと分かります。裕太さんの素直さと優しさをみんなに紹介し、それが認められることは、裕太さん自身が自分の生活を変える力にもなっていくと思います。「子どもの生活背景を子ども自身の言葉から豊かに『想像』し、そこからその子どもとの関わりを『創造』していくことが教師の仕事です」と制野さんは話されました。

「子どもにも他者理解」

みずきさんは、厳しいいじめに遭っている子でした。指導の履歴に「コミュニケーション能力に欠ける」とありました。いじめの問題を、個人のもっている能力そのものに限定して問題視し、他のことは不問にしているのではないか、教師自身が子どものありのままを受け入れてこなかったのではないかと、制野さんは疑問を持ちました。

みずきさんの日記です。

初めての学級通信は「どんぐりと山猫」でした。宮沢賢治の本は何度か読んだことがあるので知っていて・・・銀河鉄道の夜、風の又三郎、よだかの星などがあり・・・これからこんな話を聴きたいと思えます。

学級通信の題名から宮沢賢治の本をいくつか示すみずきさん。制野さんは、これだけで彼女の感性が伝わってくる気がしました。そして、賢治の本の中で特に

「よだかの星」(注)を挙げた彼女の言葉の奥にある思いを理解しようと思いました。

苦しくて叫んでいる声を聞こうとしないのがいじめであるところえた制野さんは、みずきさんの作文や日記を積極的に紹介していきます。彼女の普段は見えない姿やものの見方、心の動きをみんなで見つめていくことで、子どもたちの心は変わっていきます。

「内側から子どもたちの他者理解を促すことで、子どもたちの根源的な優しさを呼び覚ましていくことになる」と制野さんは話されました。

(注)「よだかの星」は、自分でもどうしようもない姿や名前を非難され、絶望の中を生きた鳥「よだか」の物語。

子どもにどれだけ寄り添えるか

制野さんは、東松島市の中学校で東日本大震災に遭いました。教え子の中には、家族を亡くした子やそれにもなつて転校してきた子がいました。亜美さんは、父母をなくして弟と一緒に転校してきました。

亜美さんも日記や作文に取り組みました。亜美さんは「弟は私が守る」「後悔をあまりしないようにしました」と書いていました。後悔は「してしまつた」ものなのに、彼女は自分の心を押さえつけて自分の心にふたをしているのではないかと思った制野さんは、亜美さんに「人間は後悔してもいいんじゃないの?」と話しかけました。その言葉を聞いて亜美さんは、「ほんと

うは、もっとお母さんやお父さんに甘えたかった」と涙を流しました。

大人は、どこまで子どもに寄り添うことができるでしょうか。

「子どもの話はしっかり聞く。けれど、答えを出すのはその子自身です。牽引車のように、答えを示して引っ張っていくのではなく、その子の傍らで一緒に走る伴走者でありたい。答えがないのであれば、一緒に答えを探ろうとする大人でありたい」と制野さんは話されました。

その人らしく生きられる社会を

人権とは、「その人がその人であること」が認められ、その人らしく生きられることです。制野さんは、子どもの発言を聞き取り受けとめ、その子自身が自分の答えを見つけられるよう寄り添い続けました。

「人は、他者に『聞き取られる経験』の積み重ねで、その人らしさが磨かれていくのです。私たち大人は、子どもをしっかりと見て受けとめ、『聞き取る義務』を果たさなければいけないのです。

そこには、『人がいのちに見える感覚』が存在します。いのち、つまり人権を大切にすることです。私たちが子どもをしっかり受けとめることで、教育も社会も変えていける私たち自身の力となり、それが、誰もがその人らしく生きられる社会の実現につながります」と制野さんは

話されました。

笑いあり、涙ありのお話で、「講演を聞いて泣けたのは初めてです。胸にグッときました」といった感想もありました。その他の感想をいくつか紹介します。

参加者の感想

◎家で子どもたちに会ったら、いつもよりももう少し、きちんと話を聴こう! 聞いたこと、言われたことはきちんと重く受け止めようと思いました。

◎子どもの話に、忙しいとないがしろにしがちである。その時に、しっかりと相手がどう考えて発信しているか考えながら話していきたい。

◎自分の思いを表現する手段を子どもたちに伝えたいと思います・・・書いてみたい、話してみたいと思える関係になることが一番大切だと思います。

◎子どもが不登校になった際、こんなにも自分の価値観を押し付け、子どもの人権を守っていなかったことに気づかされました。その人らしく生きられるように、自分自身も自分らしく生きられるようにいのちを見つめていきたいと思えます。

◎自分が子育てをしているとき、子どもの声や気持ちをまず受け止めていたかと考え、とぎつきました。

◎人として相手の気持ち、声、言葉を聞き取る感性を大切に育てたいと思いました。